# 時間学からみた過疎問題

保健医療経営大学　　辻　正二

## 1　目的

この報告の目的は、我が国において地域社会問題の一つである過疎問題の研究は、人口論の枠組から出ることができず、「生きるという」時間学的な視点が欠けていたのではないかということを提起することを目指している。

## 2　方法

わが国の過疎問題の原点は、1960 年代の高度経済成長期に発する。過疎問題は、今日まで大きな「動き」、「出来事」、「意味づけ」の連鎖を引き起こしてきた。例えば、「過疎問題」は、「過疎化」という認識を生み、辺地や僻地からの大量な人口移動を引き起こし、「過疎対策緊急特別措置法」等の国の対策事業、1980 年代に入っての内発的な形での「村おこし」、「まちづくり」の機運の醸成、一村一品運動、U ターン、J ターン、I ターン、地域に対する自信の回復（地域の誇り）など、を生んできた。これらは「動き」、「出来事」、「意味づけ」の連鎖であり、現在も進行している。今回の分析では、山口県山口市徳地町の変化を事例に、単なる歴史分析ではなく、「動き」、「出来事」、「意味づけ」という時間学的な視点に絞った視点から地域集落の分析を行う。

## 3　結果

我が国の過疎問題は、高度経済成長期の「自然増社会減型」の過疎（第 1 の過疎）から、1980 年代の「自然減社会源」の過疎（第 2 の過疎）を経て、2000 年に入っての「平成の大合併」の過疎（第 3 の過疎の段階へと移行しつつある。そして、現在の過疎問題は、人口減、人口流出という人口論的な視点から、集落の維持や交通弱者や一人暮らし高齢者の生活支援などに関心領域が移っているが、この先にある国や地方自治体による解決策は、行政合併、集落合併という空間論的な拡大策が常套手段のように思える。これは「人口論―空間論」的な解決である。しかし、この方策は、真の意味での解決策にならないように思われる。むしろ必要なことは、集落の現状を修復する、「意味づけ」に力点を置いた解決策の採用ではないであろうか。この視点の一例は、徳野貞雄氏の「T 型集落点検」による作業に見いだすことができる。

## 4　結論

今回の考察では、過疎地域の抱える問題を「動き」、「出来事」、「意味づけ」という時間学的な視点で捉える重要性を指摘し、過疎問題解決に「人口論―時間論」的な研究の重要性を指摘したい。

## 文献

辻　正二,2009,「市町村合併に関する時間社会学的分析」『社会分析』5-27